

ロバート・W・ブキャナン

1 イスカリオテのユダのバラッド

- イスカリオテのユダの骸^{むくろ}は
血の焔に横たわる
イスカリオテのユダの魂^{むくろ}は
骸^{むくろ}のそばに立ち尽くしていた
- 夜の帳^{とぼり}がおりる頃 5
大地も空も暗くなり
黒々としたちぎれ雲の間を
赤い月が渡っていった
- イスカリオテのユダの骸^{むくろ}は
首を吊り 息絶えここに横たわる 10
イスカリオテのユダの魂^{むくろ}は
絶望の中でおのれの骸^{むくろ}を見下ろしていた
- 人間の息^{ひと}は絶え絶えで
まるで病人の寝息のよう
一滴また一滴とその瞳にしたたるは 15
祝福の冷たい雫
- イスカリオテのユダの魂^{むくろ}は
静かにため息をついた
「我が肉と血と骨を
大地に埋めよう 20
- 大地に深く埋めよう
人々の目につかぬように
狼^{からす}や烏^{からす}がやって来ても
この骸^{むくろ}が食^{むさぼ}られぬように
- 神の思し召しか 焔の石は 25
鋼のように鋭く 硬く冷たい

埋めるべき場所を見つけるまで
我が骸^{むくろ}を運ばねばならぬ」

ぞっとするほど寒^{やっ}れ青ざめた
イスカリオテのユダの魂は
おのれの骸^{むくろ}を担ぎ上げると
その場を立ち去った 30

畑から担ぎあげた骸^{むくろ}は
氷のように冷たく
動くたびに硬い奥歯がカタカタと
賽子^{さいご}のような音をたてた 35

イスカリオテのユダの魂が
苦し気に骸^{むくろ}を担ぐ姿を
ランタンのような天の眼が
開いて照らし 再び閉じた 40

半ば足を動かしながらも
半ば冷たい風に運ばれて進んだ
冷たい手に背中を押され
振り向くこともできなかった

最初にたどり着いたのは
広大な荒野だった
足もとにはハリエニシダが茂り
冷たい風が吹いていた 45

二番目にたどり着いたのは
淀んだ池だった
池に骸^{むくろ}を投げ入れたが
綿毛のように浮かぶだけだった 50

背中に担ぎ上げた骸^{むくろ}は
水がしたたり冷えきっていた
三番目にたどり着いたのは
丘の上の十字架だった 55

吹きさらしの丘の上に十字架がひとつ
その両側に十字架がひとつずつ立ち
はりつけにされた
骸骨が三つ揺れていた 60

真ん中の十字架の肩で
白い鳩がまどろんでいた
頭を翼にうずめる姿が
薄暗い光の中にぼんやりと見えた

真ん中の十字架の下で 65
^{はかあな}
墓穴が大きく口を開けた
だがイスカリオテのユダの魂は
身震いして静かに立ち去った

四番目にたどり着いたのは
恐怖の橋だった 70
その下の激流は
深く 速く ^{あか} 赫かった

ユダは ^{むくろ} 骸 を投げ入れはしなかった
激流の中に臍気に見える顔と
^{むくろ} 骸 を突き返すように揺れる腕に 75
恐れ慄いたからだった

イスカリオテのユダの魂は
恐怖の橋に背を向けた
荒れた河の恐ろしい ^{しぶき} 飛沫が
ユダの ^{むくろ} 骸 を ^{あか} 赫く染めた 80

いくつもの昼と夜を ユダは ^{さまよ} 彷徨った
果てしなく広がる平原を
昼はまるで先の見えぬ ^{あまぎり} 雨霧のように
夜はまるで凄まじき ^{しゅうう} 驟雨のように過ぎた

いくつもの昼と夜を ユダは ^{さまよ} 彷徨った 85

悲しみの森を抜けて
夜はまるで嘆きの風のように
昼はまるで吹き寄せる雪のように過ぎた

イスカリオテのユダの魂は
疲れ果てた顔でやってきた 90
独り 独り ただひとりきり
誰もいない地に ただひとりきり

ユダは東を彷徨い 西を彷徨った
だが人の声はまるで聞こえなかった
何か月も何年も 悲しみの涙にくれて 95
ユダはただ彷徨いつづけた

何か月も何年も 悲しみの涙にくれて
独り夜をさびしく彷徨いつづけた
イスカリオテのユダの魂は
とうとう遥かに灯りを見つけた 100

荒野の果てのその灯りは
あまりに微かで
暗い夜の海にまたたく
灯台の灯りのようだった

イスカリオテのユダの魂は 105
その灯りに向かって 這うように進んだ
やがて降りはじめた雨が唸りをあげて
ユダに吹きつけた

いくつもの昼と夜を ユダは彷徨った
後ろから手で押されながら 110
昼は漆黒の雨に打たれて
夜は突風に煽られて過ぎた

イスカリオテのユダの魂は
不気味で哀れで 背の高いその姿で
静まり返った真夜中 灯りのともる館を前に 115

たった独りで立ち尽した

荒野を覆う真っ白な雪を

ただユダの足跡だけが黒々と解かしていた

幻のような銀色の月が

黄色い灯りを抱きかかえて昇った

120

軒には氷柱がいくつも連なり

壁は白い雪の中に埋もれ

館内で賑わうたくさんの人影が

明るい窓に映し出された

婚礼を祝して集まった人々の影が

どうしたことが歩き回っていた

イスカリオテのユダは

雪の上に骸を横たえた

125

イスカリオテのユダは

雪の上に骸を横たえた

イスカリオテのユダの魂は

上へ下へと走りまわった

130

上へ下へ 前へ後ろへうろうると

ユダの魂は走りまわった

まるで北極を滑るように走りまわる

痩せこけたシロクマのように

135

テーブルの上座にいるのは花婿だった

いくつもの灯りが眩しく光っていた

「ああ あれはいったい誰か」花婿が問うた

「あの疲れた足音はいったい何」

140

館の外を見やり 客人のひとりが応えた

優しい声でゆっくりと

「雪の上に黒い足跡を残して

上へ下へ走るオオカミでしょう」

真っ白な衣装に身を包んだ花婿は
テーブルの上座についた
「ああ 外で呻いているのは誰か」
神に祝福された花婿が問うた

145

館の外を見やり 客人のひとりが応えた
低い声で怒りを込めて
「あちらこちらを滑るように走る
イスカリオテのユダの魂です」

150

イスカリオテのユダの魂は
じっと黙って立ち尽くした
すると灯りを手にした花婿が
扉から姿を現した

155

扉を開いた花婿は
真っ白な衣装に身を包んでいた
館内では主の晩餐が
輝かしく繰り広げられていた

160

花婿は目を細めてユダを見つめた
その表情は輝いていた
「なぜ罪を犯した骸を担ぎ
主の晩餐にやって来たのですか」

陰く悲し気で骸を下した
イスカリオテのユダの魂が応えた
「いくつもの夜と昼を彷徨いましたが
どこにも灯りはありませんでした」

165

館内にいた招待客たちが
怒りに燃える目をして叫んだ
「イスカリオテのユダの魂を鞭打って
夜の闇の中に追いやってしまえ」

170

開け放った戸口に立った花婿が
静かにゆっくりと合図の手を振った

花婿が三度両手を振った時
宙^{そら}は一面真っ白な雪で覆われた 175

刻々と舞い落ちる雪が
地面に触れるその前に
一羽に続き たちまち千羽の白鳩に変わり
羽音を美しく奏でた 180

イスカリオテのユダの骸^{むくろ}は
ふわりと浮かび消え去った
骸^{むくろ}を運び去った白鳩たちの羽は
まるで死衣^{しにころも}のようだった

開け放った戸口に立った花婿が 185
優しく微笑み手招きした
イスカリオテのユダの魂は
静かに近づき その足もとに平伏^{ひれふ}した

「主の晚餐の準備は整いました
幾多の蝋燭が輝いています 190
私はワインを注がずに
ずっとあなたを待っていました」

ついに主の晚餐のワインが注がれ
広間の蝋燭はいつそう輝きを増す
ユダは花婿の足を洗うと 195
自らの髪でその足を拭^{ぬぐ}う

(宮原牧子訳)